

# 日韓中における青年の集団主義的態度

——家族と親族集団における相対的態度を中心にして——

近 藤 敏 夫

## 1 問題関心

東アジアでは個人主義的な民主主義は育まれにくい。儒教ルネッサンスを支持する立場からすれば、今後の東アジアには伝統的集団主義を再構成した民主主義の可能性が考えられる<sup>1)</sup>。経済学の観点からは、東アジアに特有の社会的合理性が生まれつつあるという見解がある<sup>2)</sup>。ここで社会的合理性の特徴を目的合理性との対比で述べておこう。

まず、近代欧米の目的合理性の特徴は、(a) 人は所与の目的を達成するのに最も適した行動をとる、ただし、(b) 人は目的そのものの正当性を問うことはできない、という2点である<sup>3)</sup>。歴史的にみて、目的そのものの正当性は唯一絶対神が与えるものであって、個人が問うべき問題ではなかった。個人は所与の目的を達成することによって自己実現を図り、その結果として社会が構成されるのである。つまり、近代欧米の個人主義が可能になったのは、人々に行動の指針を与える絶対的で普遍的な基準が想定される限りにおいてであった。

これに対して、東アジアに期待される社会的合理性の特徴は、(a) 人は自分が掲げた目的の正当化とその達成のために最も適した行動をとり、また、(b) 目的の正当性は一般の人々によって承認されなければならない、という2点である<sup>4)</sup>。社会的合理性が目的合理性と異なる点は、目的が所与のものではないこと、また目的の正当性が人々によって社会的に承認されなければならないことである。社会的合理性は経済領

1) 金日坤「東アジアの経済発展と儒教文化」溝口・中嶋編『儒教ルネッサンスを考える』大修館書店、1991、105頁。李建永・板谷茂他1994『アジア発展のダイナミクス』勁草書房、1994、153頁。

2) 中嶋航一・板谷茂他1995『アジア発展のエートス』勁草書房、1995。

3) 前掲書、9-10頁。

4) 前掲書、11-12頁。

域だけでなく、その他の社会領域にも通用する合理性として評価することができるだろう。今後、東アジアの民主主義が社会的合理性に基づいて形成されるとするなら、そのための条件を伝統的集団主義の中に探ってみる必要がある。

本稿では、社会的合理性を実現するための集団主義的態度を問題にする。以下、2節で民主主義の構成要素になりえる集団主義的態度を選び出し、3節と4節で今回の調査結果から日・韓・中の青年の集団主義的態度の特徴を比較検討してみたい。

## 2 人間関係の相対性

日韓中の伝統的集団主義の共通点として儒教倫理をあげることができる。儒教の五倫五常は家族を基本とする倫理が他の集団へと拡張されたものである。すなわち、親子、夫婦、学校、職場の人間関係に対応して、父子の親、夫婦の別、朋友の信、君臣の義に対応した倫理がある。儒教倫理は集団内での個人と他者との関係を明示した上で、個人が従うべき倫理を規定している。したがって、相手によって自分の立場が変わり、従うべき倫理も異なってくる。このように集団主義の人間関係には相対的態度がみられる。集団の種類が家族や親族から学校、職場、地域、国家に変わったとしても、このような相対性は維持されたままである。儒教の特徴は集団内における個々の人間関係を規制する点にある。

個人主義では普遍的、一般的な個人同志の関係が前提にされるのに対して、集団主義では特定の他者との相対的な人間関係が重視される。本稿では、集団主義の特徴が人間関係の相対性にあると考える。この相対性を生かすことが社会的合理性の実現のためには必要である。

伝統的集団主義の第一の弊害は、年齢規範や性別規範が権威的な上下関係を生み出したことである。この上下関係を平等な関係に転換することが、人間関係の相対性を生かすためには要請される。先述のように社会的合理性の特徴の第一は、(a) 個人が自らの目的を自発的に掲げることである。それゆえ、集団内の属性規範によって個人の役割が固定されたり、属性によって目的が所与のものになってしまっているはいけな。今後、東アジアで民主主義が育まれるためには、性別規範、年齢規範に基づく権威主義的態度が克服されなければならない。たしかに、そのための条件を個人主義的な自由、平等、友愛の精神に求めることも可能だろう。だが、本稿では集団主義の中に権威主義的態度を再構成するための条件を探ってみることにする。

東アジアの伝統的集団主義では、恩の觀念が上下の支配関係を正当化してきたと考

えられている。しかし、恩が含意する互惠的態度の中に権威主義的態度を再構成させる条件を見いだすことも可能だろう。ここでは恩と義理の観念を中心に、互惠的態度の意義を考察してみる。

日本では、近世以降、恩と義理が人間関係を規制する倫理として重視されてきた。恩も義理も状況に応じて他者と互惠関係を結ぶことを意味する。川島武宜によれば<sup>5)</sup>、義理は集団内の特定の他者と一定の関係を維持、強化するために必要な義務概念であり、当事者が同質の社会階級に属していることを前提にしている。義理を受けた者は、それと同等なものを自分と相手の社会的地位に応じて返さなければならない。義理の互惠性は、平等の社会関係を前提にするが、外生的に生じる義務であるともみなされる。

他方、恩は、上下関係を前提にするが、個人の自発性に依存している。日本人の恩は互惠的相互作用を、当事者の一方の自発的好意にゆだねる形で維持しようとする社会意識である<sup>6)</sup>。恩返しは下位の者の自由意志によってなされるのである。また、日本では孝が恩の互惠性に基づくため、中国や韓国のように親孝行が絶対的なものにならないという<sup>7)</sup>。日本では状況によっては子供が親の恩を受けていないと感ずることがあり、その場合は恩返しとしての親孝行が絶対的な規制力を持たないのである。

義理や恩に含意される互惠的態度が日本の集団主義を可能にしてきたと考えられる。権威主義的態度を克服し、人間関係の相対性を生かすためには、義理の平等性と恩の自発性を兼ね備えた互惠的態度を再評価することが必要だろう。

つぎに、伝統的集団主義の第二の弊害として、集団の閉鎖性があげられることが多い。人間関係の相対性が集団内の他者と集団外の他者に対する個人の態度の違いとして現れ、集団の閉鎖性を強化するのである。そして、集団の閉鎖性が特権集団を生みだし、非特権集団の反感と自己主張を生み出してきた。それゆえ、特権集団は支配の正当性を証明する必要があった。伝統的集団主義では支配の正当性ばかりでなく、その他の目的の正当性についても、特権集団内の権威者の恣意的判断に左右されるという弊害があった。しかし、目的の正当性は集団内だけでなく集団外の人々によっても社会的に承認される必要がある。先述のように社会的合理性の第二の特徴は、(b) 個人が掲げた目的が人々によって承認されることである。そのためには集団が開放的に

5) 川島武宜「義理」『思想』9 No.327岩波書店、1951、24-25頁。

6) 浜口恵俊「日本社会論」『CD-ROM 世界大百科事典第2版』日立デジタル平凡社、1998、12頁。

7) 川島武宜『イデオロギーとしての家族制度』岩波書店、1957、89-93頁。

なって正当性が社会的に承認される必要があるだろう。その条件も集団主義の中に探ることが可能である。ただし、ここではその詳細は省く<sup>8)</sup>。

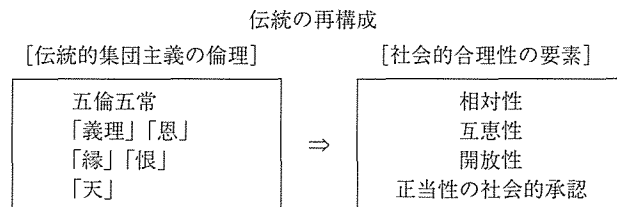
本章では、人間関係の相対性を生かすためには権威主義的態度の再構成と互惠的態度の再評価が要請されるという前提にたつて、以下、日韓中の青年の集団主義的態度を比較検討する。なお、集団の開放性と正当性の社会的承認については今後の検討課題とする。

### 3 親子関係にみる権威主義的態度

#### 3.1 問題の設定

伝統的集団主義では、人間関係が性別規範と年齢規範によって相対的なものになり、かつ、その人間関係の相対性に権威主義的態度が含意されるのである。とくに、

- 8) 伝統的集団主義の中から、社会的合理性を実現するための条件を以下のように4つの要素に分けて抽出してみたい。



まず、日本の「義理」は集団内の倫理にとどまるが、「恩」は集団を越える倫理としても重要である。日本の伝統的集団主義では集団の閉鎖性と開放性が共存すると考えられる。これを日本のイエの特殊性にみることも可能かもしれない。例えば、日本のイエでは非血縁者を他のイエから養子に迎えてイエの存続を計ることがある。日本では集団外の者に対しても恩を受けたり恩返しをしたりといった関係がみられる。恩によって可能となる集団の「開放性」も人間関係の「相対性」を生かすためには要請されるだろう。

韓国では日本以上に「縁」による集団の凝集力と閉鎖性が強いと考えられる。血縁、地縁、学縁によって閉じた集団が形成される。集団は機能的に分化しておらず、特定の集団が生活全般にわたる人間関係に影響を及ぼす。集団内の成員間では互惠の関係が強いと考えられる。ただし、特権集団の閉鎖性が強いと、非特権集団の反感を引き起こし、集団主義の自己主張に結びつく。これを朝鮮民族の「恨」と結びつけ、非特権集団の「恨」が特権集団の閉鎖性を取り崩すためには要請されるという考え方もある（中嶋、前掲書、53-73頁）。

また、伝統的集団主義では、特権集団が非特権集団の自己主張に対抗するために支配の正当性を証明しなければならなかった。歴史的には、中国と韓国における支配の正当性の根拠は科举試験に求められる。ただし、中国では古代から、「天」の思想によって支配の正当性の証明が必須とされてきた（竹内実『新版 中国の思想 —— 伝統と現代 ——』日本放送出版会、1999、175-91頁）。また、「天」によって支配・服従関係が急激に転覆させられ、多くの変革や革命が起こってきたともいう。「天」が意味するものは一般の人々の意志、つまり「官」に対する「民」の意志である。古くはそれが農民の意志であり、現在は人民の意志であると考えられる。現代中国では、抽象的な「天」に代わって、具体的かつ自覚的に一般の人民による正当性の社会的承認が求められるようになってきたと考えられる。

東アジアでは伝統的に家族を基本とする儒教的な集団主義が強いと考えられてきた。儒教の家族観の基本は孝であり、孝を実現するために年齢や性差を軸として人間関係が形成されてきた。そして、年齢規範や性別規範が家族内の倫理にとどまらず、家族や親族を越えて職場、地域、国家にも広がっていくものと考えられてきた。つまり、孝から忠が派生して東アジアの社会規範が構成されたと考えられている。

たしかに近代欧米の家族にも年齢（世代）と性差に基づいた相対的な親子関係があるだろう。また、近代欧米の親子関係にも権威主義的態度がみられるかもしれない。しかし、近代欧米では、個人に行動の指針を与える絶対的で普遍的な基準が想定される。個人主義の理念では相手によって態度を変えることは許されないため、家族内の権威主義的態度が学校、職場、地域、国家では正当性を持ちえないと考えられる。

東アジアの集団主義では、まず家族内で権威主義的態度が形成され、それが他の領域における権威主義的態度に帰結する。ただし、今日では権威主義的な親子関係が日本社会における権威主義的態度の形成を十分に語っていないという知見もある<sup>9)</sup>。また、権威主義的態度や「伝統－近代」の意識の違いについては、学歴が影響しているともいう<sup>10)</sup>。しかし、権威主義的態度の場合に限らず、親子関係にみられるその他の態度も集団主義的態度の原型になっている可能性がある。そこで、本稿では日韓中の大学生を中心にして親子関係の相対性の特徴を検討し、伝統的な権威主義的態度とは異なる集団主義的態度が存在することを示してみたい。

### 3.2 集団主義的態度の分析図式

まず、先行研究から日本人の父子関係の特徴を整理しておこう。われわれの質問項目の間2は、もともとNHKの「日本人の意識調査」（以下、NHK調査と呼ぶ）の中で1973年から1998年までの5年ごとに6回にわたって父親についてのみ質問された項目である。NHK調査では数量化Ⅲ類の分析結果から横軸と縦軸をクロスさせて4つの類型を作っている<sup>11)</sup>。調査年度が進むにしたがって軸の解釈が変化してきてはい。だが、大まかにみると、横軸の一方の極には家父長の権威を重視する男性優位の伝統尊重志向、他方の極には近代的な男女平等の伝統離脱志向が想定されている。ま

9) 尾嶋史章・吉川徹・直井優、「社会的態度の親子三者連関の国際比較——90年代日本と70年代アメリカ」『家族社会学研究』(8), 1996, 111-24頁。轟亮「反権威主義的態度の高まりは何をもたらすのか——政治意識と権威主義的態度——」、『日本の階層システム 2 公平感と政治意識』海野道郎編, 東京大学出版会, 2000, 208頁。

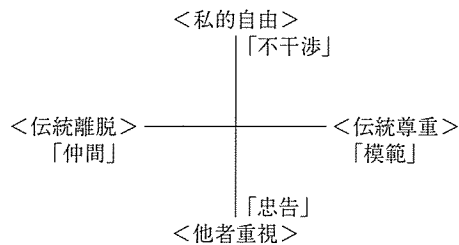
10) 釜野さおり「家族・結婚」林知己夫他『国民性七か国比較』出光出版, 1998, 54頁。吉川徹「学校教育の諸条件と青少年の社会的態度形成」『社会学評論』46(3), 1996, 437頁。

11) NHK放送世論調査所編『現代日本人の意識構造』日本放送出版協会, 1979, 232-34頁。

た、縦軸の一方の極は人間関係をまじめに考える他者重視志向であり、他方の極は個人重視やあそび重視などの私的自由志向であるといつてよい<sup>12)</sup>。本稿では、NHK 調査の分析図式を基本にして、父親に期待される態度の分析図式を作ることにした(図1)。したがって、日本人の父子関係における意識構造をモデルにして日韓中の比較検討を行うことになる。

図1の留意点の第一は、横軸が「伝統-近代」の軸になっておらず、「伝統尊重-伝統離脱」の軸になっていることである。つまり、横軸の一方が伝統的権威への志向を示すのに対して、その対極が伝統に対抗する価値観を示しておらず、ただ単に伝統からの離脱を示しているのである<sup>13)</sup>。日本人の意識構造には伝統的権威に対抗するものとしての近代的価値が存在していないと推測される。

図1 父親に期待される態度の四類型



権威主義的態度の強さ：模範>忠告>仲間>不干渉

図1の留意点の第二は、父親に期待される4つの態度(模範、忠告、仲間、不干渉)が縦軸と横軸の上にとり、しかも上下左右に完全に分かれることである。調査年度と対象者の世代によって軸の解釈や分布の仕方は多少変化するが<sup>14)</sup>、この傾向は一貫したものである。本稿でも父親に期待される態度を4つに区分することにする。すなわち、「模範」が<伝統尊重>、「忠告」が<他者重視>、「仲間」が<伝統離脱>、「不干渉」が<私的自由>の軸上に位置するのである。

NHK 調査では、父親に子供の「模範」となる絶対的権威を期待する人が少なくなり、父親が「忠告」を与えるという相対的権威に移行もしくは変質しているという。

12) 前掲書、73頁。NHK 放送文化研究所編『現代日本人の意識構造 第4版』日本放送出版協会、1998、200頁。

13) NHK 放送世論調査所編(1979)前掲書、232頁。

14) NHK 放送世論調査所編(1979)前掲書、73頁。NHK 放送世論調査所編『第2日本人の意識』日本放送出版協会、1980、23-24頁。NHK 放送文化研究所編(1998)前掲書、200頁。

さらに父親が「仲間」であるという権威不在の父親像が支持を得ているともいう<sup>15)</sup>。この傾向は1998年のNHK調査まで一貫しているものであり、家父長的な父親ではなく、先輩のように諭し友人のようにつきあえる父親が望まれているという<sup>16)</sup>。さらに、1978年から1998年まで、父親に「不干涉」を求める率が増加してきており、子供を信頼して欲しいという側面とともに、父親に放任を求める傾向が強まってきたという<sup>17)</sup>。そこで、われわれの調査では、父親の権威の強さを基準にして4つの態度に順序づけを行うことにした。すなわち、絶対的権威の「模範」、相対的権威の「忠告」、権威不在の「仲間」、権威と無関係な「不干涉」の順に権威主義的態度が強いと仮定した。この順序づけは暫定的なものであり、これ自体が検証されなければならない。だが、ここでは便宜上この順序づけに基づいて権威主義的態度の強さを比較する<sup>18)</sup>。つまり、親子関係の相対性を権威主義的態度の強度によって分析することになる。

また、われわれの調査では、父親の態度に加えて母親の態度を尋ねた。NHK調査では、父親に期待する態度が母親のそれよりも社会変動を反映しやすいという仮定のもとに、子供が父親に求める態度しか質問されていない。だが、われわれの調査では、父子関係と母子関係の違いを明らかにするために、母親についても父親と同様の選択肢を用いて尋ねることにした。ただし、母親に期待する態度は図1の類型に区分されないだろう。例えば、母親に「仲間」の態度を求める場合にも伝統尊重型が含まれる可能性がある。すなわち、父親と母親を区別した上で、母親よりも父親に強い権威を求めるなら、これを伝統尊重型であるとみなしてよいだろう。このいわば伝統尊重型(Ⅱ)の解釈は父親に求める態度からは現れてこない類型である。しかし、母親と父親の権威の差を考慮に入れた場合に想定される類型である。そこで、われわれの調査では、父・母・子の三者関係の中で子供がとる態度に違いがないかどうか、すなわち親の性差による相対性の様相を検討することにした。

ここでことわりを述べておく。本稿の問題関心からすれば、子供の性差(息子と娘)による相対性の検討も必要になってくる。しかし、問2では「息子」と「娘」の

15) NHK放送世論調査所編(1979)前掲書、74-75頁。

16) NHK放送文化研究所編『現代日本人の意識構造 第5版』日本放送出版協会、2000、60-61頁。

17) 前掲書、61頁。

18) 権威主義的態度の順序づけで問題となるのは「不干涉」の位置づけである。不干涉の態度に放任を求める傾向があるとみなせば、不干涉は権威主義的父子関係を拒否する態度であるともいえる。したがって、権威主義的態度の強さを基準にした場合は、「不干涉」が4つの態度の中の最後に位置すると考えてよいだろう。ただし、「不干涉」は私的自由の軸上に類型化され、権威主義的人間関係から独立した次元に属する可能性がある。

区別がなされていない。例えば、「母親は息子にどんな態度を取るべきだと、あなたは思いますか」という質問文になっていない。したがって、子供の性差による相対性は今後の検討課題とする。本稿では回答者の性差が子供の性差に対応するものとみなし（すなわち、回答者は自分自身を準拠点にして父親と母親に求める態度を答えたものとみなし）、性別の回答傾向を「男女の相対性」として紹介する。

以下、「親子の相対性」、「父母の相対性」、「男女の相対性」の3つの観点から日韓中の青年にみられる家族内の人間関係の相対性を比較検討する。

### 3.3 父親に求める態度と母親に求める態度

われわれの調査の問2では、父親と母親が子供に取るべき態度を尋ねている。子供と親の属性によって親に求められる態度が変わっていないかどうか、子供が親に期待する態度の相対性を調べてみよう。問2は現実の親子関係について尋ねたものではなく、青年が親に望む規範的態度を反映していると考えてよいだろう。

なお、以下の考察では、基本的に日韓中の3ヶ国比較をしているが、対象者集団は8つの地域・成層に分かれている。そこで、日本の傾向として紹介する場合は、京都の学生と補充調査の大阪の学生に顕著な違いがないものを取り上げることにした。韓国、中国の場合も同様である。

#### 3.3.1 日本の学生：他者重視型

「親子の相対性」については、日本の学生は父親にも母親にも「忠告」を求める者が多く、つぎに「仲間」の態度を求める者が多い（問2a, 問2b）。したがって、親子関係は他者重視型が基本であり、つぎに伝統離脱型が続くものと推測できる。

ただし、表1で「父母の相対性」をみると、母親よりも父親に「忠告」を求める者が多く、父親よりも母親に「仲間」の態度を求める者が多い。つまり、父親には相対的な権威主義的態度を求め、母親には権威不在の態度を求める傾向がみられる。父親に権威を多く求める態度が伝統的な権威主義的態度の現れであると考えれば、父親に「忠告」を求める学生の中にも伝統尊重型（Ⅱ）の者が含まれる可能性がある。

そこで、父親に期待する態度と母親に期待する態度をクロスさせて、その組み合わせをみると（表2）、「父に強い権威」を期待する者が多くなる（京都21.9、大阪24.7）。その逆に「母に強い権威」を期待する者は少ない（京都7.7、大阪4.0）。つまり、子供に対する父親と母親の関係を考慮に入れるなら、伝統尊重型（Ⅱ）が加わることになり、伝統尊重型が増える可能性がある。

なお、「子供の性差による相対性」の代用として「男女の相対性」をみると、男性



表1 父親に求める態度と母親に求める態度の差 (問2a-問2b)

(単位：%)

			京都	大阪	テグ	全州	北京学	北京職	河南	山東	合計
全体	父親に求める	模範	3.2	6.1	13.9	10.7	19.5	10.9	6.3	9.3	10.9
	態度から	忠告	11.8	9.1	8.4	8.8	0.7	-1.9	-8.0	-8.1	5.1
	母親に求める	仲間	-15.2	-9.6	-22.4	-17.7	-6.5	-7.2	8.5	7.3	-12.2
	態度を減算	不干涉	0.6	-5.6	0.5	-1.9	-10.5	-1.6	-7.7	-8.5	-3.1
			京都	大阪	テグ	全州	北学	北職	河南	山東	合計
男性	父親に求める	模範	3.3	6.3	9.1	8.5	21.2	12.4	0.7	14.4	10.3
	態度から	忠告	11.6	8.9	8.4	8.1	1.7	-1.4	-7.9	-8.2	4.9
	母親に求める	仲間	-9.0	-8.9	-15.4	-14.6	-2.5	-3.4	12.3	8.6	-6.7
	態度を減算	不干涉	-5.4	-6.3	-2.0	-2.3	-16.8	-7.6	-5.7	-14.8	-7.6
			京都	大阪*	テグ	全州	北京学	北京職	河南	山東	合計
女性	父親に求める	模範	3.1		16.1	14.2	16.3	9.8	13.4	3.4	11.5
	態度から	忠告	12.0		8.4	9.9	-1.3	-2.3	-7.2	-7.3	5.5
	母親に求める	仲間	-20.9		-25.5	-22.3	-14.2	-10.1	4.1	6.2	-17.9
	態度を減算	不干涉	6.1		1.7	-1.3	1.7	3.2	-11.3	-2.3	1.5

\*大阪学生の女性は n=5 と少ないため省略

の方が父親に「模範」を求める傾向が強く（問2a）、女性の方が母親に「仲間」の態度を求める傾向が強い（問2b）。だが、韓国や中国と比較して男女差は少ない。このことから日本の学生は子供の性差によって父親と母親に求める態度に差が小さいものと推測できる。

以上、日本では、子供が親に「忠告」の態度を期待しており、基本的に他者重視型である。つまり、世代の違いによって相手に権威主義的態度を求めるという相対性がみられる。しかし、親の性差によって子供が異なる態度を親に求める傾向は少ない。また、子供の性差（回答者の男女差で代用）による相対性の違いもあまりない。ただし、父母をセットにしてみると、父親の方に強い権威主義的態度を期待する傾向があり、父・母・子の三者関係では性差による相対性の違いがみられる。

### 3.3.2 韓国の学生：伝統尊重型

韓国の学生は父親に「忠告」を求める者が多く、つぎに「模範」を求める者が多い（問2a）。また、母親には「仲間」の態度を求める者が多い（問2b）。父親に期待する態度を中心にみるなら、他者重視型が主で伝統尊重型がそれに続く。他方、母親の態度でみれば伝統離脱型が多いことになる。つまり、父子関係でみると世代の違いによる権威関係がみられるが、母子関係には権威関係があまりみられない。しかし、母子関係の特徴から、韓国の学生には伝統離脱型が多いということとはできない。問題

表2 父親に求める態度と母親に求める態度の組み合わせ

(単位：%)

父親・母親	京都 n=816	大阪 n=139	テグ n=964	全州 n=584	北学 n=679	北職 n=327	河南 n=228	山東 n=247	全体 n=4043
模範・模範	3.9	4.0	13.0	13.7	3.7	5.8	7.0	11.7	8.3
忠告・忠告	43.3	36.9	21.0	26.2	4.7	4.6	3.1	3.2	20.9
仲間・仲間	14.8	17.2	21.0	17.3	29.0	26.9	27.6	34.8	22.1
不干渉・不干渉	4.5	8.1	2.5	1.7	7.1	8.0	11.4	10.5	5.3
父母同一態度計	66.5	66.2	57.5	58.9	44.5	45.3	49.1	60.2	56.6
模範・忠告	3.1	5.1	6.4	6.5	4.9	2.8	3.9	3.2	4.8
模範・仲間	2.0	2.0	10.2	6.8	9.0	7.0	4.4	5.7	6.6
模範・不干渉	0.5	0.5	0.6	1.5	4.7	4.0	3.5	4.0	2.1
忠告・仲間	12.5	11.1	13.7	12.7	4.7	8.6	1.8	1.2	9.8
忠告・不干渉	2.8	4.0	0.8	1.2	4.3	3.1	1.3	1.6	2.3
仲間・不干渉	1.0	2.0	0.6	0.5	7.2	7.3	12.3	8.5	3.5
父に強い権威計	21.9	24.7	32.3	29.2	34.8	32.8	27.2	24.2	29.1
忠告・模範	2.1	1.0	2.2	3.8	0.6	0.3	1.3	0.0	1.7
仲間・模範	0.2	0.5	1.1	0.5	0.9	0.9	1.8	2.0	0.9
仲間・忠告	0.6	1.5	1.2	1.9	3.1	6.1	5.3	6.1	2.4
不干渉・模範	0.2	0.0	0.1	0.0	0.1	1.5	2.6	1.6	0.5
不干渉・忠告	2.1	0.5	0.9	0.5	1.8	5.8	3.1	1.6	2.0
不干渉・仲間	2.5	0.5	1.7	1.0	3.7	5.8	5.3	2.8	2.6
母に強い権威計	7.7	4.0	7.2	7.7	10.2	20.4	19.4	14.1	9.8
*同一態度合計	69.4	70.2	59.1	60.6	48.5	46.5	50.9	60.7	58.8
違う態度合計	30.6	29.8	40.9	39.4	51.5	53.5	49.1	39.3	41.2

\*同一態度合計と違う態度合計の値は「その他」,「わからない」の選択肢も加算してある。

は、父親に求める態度と母親に求める態度が異なる点、すなわち「父母の相対性」の違いが大きいことにある。

そこで、表2より父母をセットにしてみると、母親に「仲間」の態度を求めた者が、父親に対して「模範」と「忠告」を求める傾向が強いことが分かる。つまり、韓国では父親と母親に対して異なる態度を期待し、かつ「父に強い権威」を求める者が多いのである（テグ32.3, 全州29.2）。その逆に「母に強い権威」を求める者は少ない（テグ7.2, 全州7.7）。父親に「忠告」を求めると同時に母親に「仲間」の態度を求める者を伝統尊重型（Ⅱ）として加えるなら、韓国の学生は基本的に伝統尊重型であると推測できる。

さらに、韓国では「男女の相対性」もかなり大きい。男性の方が親に「忠告」を求める者が多く、女性の方が「仲間」の態度を求める者が多い（問2a, 問2b）。しか

し、このことから女性の方が伝統離脱型であると予測することはできない。なぜなら、第一に、父親に「模範」を求める比率が男女でほぼ同じであり（問2a）、第二に、女性の方が父親には「模範」を求め、母親には「仲間」を求める傾向が強いからである（表1）。これは女性の方が父親と母親を区別した上で、父親に強い権威を求める可能性があることを示している<sup>19)</sup>。

以上、韓国では、親子の世代による相対性が高く、子供は親に権威主義的態度を求める。また、父母の相対性も高く、子供は父親の方に権威主義的態度を求める傾向が強い。さらに、男女の相対性（子供の性差による相対性）も高いと予測できる。

### 3.3.3 中国の青年：伝統離脱型と4類型混在型

われわれの調査では中国の対象者の選定に問題があった。今回調査した4つの地域・成層（北京学生、北京職業人、河南省農村青年、山東省農村青年）が中国の青年を代表するものではない。調査結果からも各地域・成層間に違いがみられる。ただし、本稿では中国の地域・成層間の違いを比較することが目的ではない。そこで、基本的に北京の学生と職業青年に共通する特徴について紹介し、日本の学生や韓国の学生との違いがみられるものを中国青年の特徴とみなすことにする。

まず、[親子の相対性]をみると、中国の青年は父親にも母親にも「仲間」の態度を求める者が4割から5割を占める（問2a、問2b）。また、「不干渉」を求める者が日本や韓国に比べて多い。中国の青年は伝統離脱型が多く、ついで私的自由型も比較的多いといえる。つまり、子供は親に対して権威不在の「仲間」の態度や、権威と無関係な「不干渉」の態度を求める傾向がある。中国では世代の違いによる相対性はあまりなく、親子が同世代の者と同様に接することが望まれていると考えられる。

ただし、[父母の相対性]をみると、父親に「模範」を求める者が日本よりも多くなっている（問2a）。また、表2でみると、中国では「母に強い権威」を求める者が多いことも特徴的である。つまり、父母の性差による相対性は、父親と母親のどちらか一方の権威が強いということになっていない。中国の特徴は4つの類型が混在していることである。

[男女の相対性]については、韓国の学生と同様の傾向があり、女性が父親にも母親にも「仲間」の態度を求めている（問2a、問3b）。だが、その他の態度について

19) 表2で、さらに男女別にクロスを取ってみると、とくにテグの女子学生は「父に強い態度」を求める傾向が強い（女性34.9、男性27.2）。全州学生は「父に強い態度」を求める傾向に男女差は少ない（女性30.5、男性28.5）が、それでも女性が「父に強い権威」を求める率が高い。

は、中国の4つの地域・成層でまとまった特徴がみられない。

#### 3.3.4 日韓中の国別比較

日韓中の親子関係における相対性の特徴を要約しておこう。もちろん、8地域・成層間には国別単位では要約しきれないところがあるが、ほぼ国別の特徴が現れていると考えてよい。

まず、[親子の相対性]をみると、子供が父親に求める態度に関して8つの地域・成層が国別に群をなしていることがわかる（問2a）。すなわち、父親に「模範」を求める比率は、韓国（テグ、全州）で高く、つぎに中国（北学、山東、北職、河南）、日本（大阪、京都）と続き、8つの地域・成層が国別に群をなすことが分かる。この結果からは、父親に権威主義的態度を求める傾向は韓国、中国、日本の順に強いと予測できる。

つぎに、子供が母親に求める態度に関しては、父親の場合に比べて8つの地域・成層が国別に際だった群をなしていない。例えば、母親に「模範」を求める比率の幅は、全州の最高18.2%から北京学生の最低5.4%までの12.8ポイントである（問2b）。これに対して、父親に「模範」を求める比率の幅はテグの30.4%から京都の9.7%まで20.7ポイントである（問2a）。つまり、「模範」を求める比率を父母で比較してみると、母親の方が父親より7.9ポイントも狭くなっている。また、母親に「模範」を求める比率は韓国の学生と山東農村・河南農村で高く、北京学生が一番低くなっている。つまり、8つの地域・成層が入り組んでいるのである。

その他の態度で父母を比較してみても、地域・成層別比率の最高値と最低値の差は母親の方がすべて狭くなる。すなわち、「忠告」24.9ポイント、「仲間」17.5ポイント、「不干涉」6.2ポイントと、母親の方が比率の幅が狭くなっている。父親に期待する態度は国別に顕著な差がみられるのに対して、母親に期待する態度には差があまりない。その原因は、父親に期待する態度の方が社会変動を反映するために<sup>20)</sup>、各国別の社会状況が現れやすいからであろう。これに対して、母親に期待される態度は家族内の情緒的關係を表すために、各国別の差が少ないものと推測することができる。

そこで、表2から父母をセットにしてみると、父親と母親に対して違う態度を求める割合（「違う態度合計」）は、ほぼ日本が3割、韓国が4割、中国が5割となる。中国が最も父母の性差による相対性が高いことが分かる。中国の青年には「母親に強い権威」を求める者がかなり多く、そのために日本や韓国よりも「父母の相対性」が高

20) NHK 放送世論調査所編（1979）前掲書，72頁

表3 家族内の人間関係の相対性

相対性の軸	世代差	性 差	
	親子の相対性	父母の相対性	男女の相対性
日本の学生 (他者重視型)	権威度 中	相違度 低 父親の権威 中	相違度 低 男女ともやや権威的
韓国の学生 (伝統尊重型)	権威度 高	相違度 中 父親の権威 高	相違度 高 男性が権威的
中国の青年 (伝統離脱型)	権威度 低	相違度 高 父母の権威差 少	相違度 中・高 地域・成層で異なる

くなるのである。つまり、中国の青年は父親と母親を区別する傾向は強いが、だからといって父親の方に権威を置いていない。

[男女の相対性] については、日本の学生が性差によって親に求める態度の違いが少ない（問2a, 問2b）。韓国と中国では女性が父親にも母親にも「仲間」の態度を求める傾向が強いのに対して、日本では女子学生が父親に「仲間」の態度を求める比率が男子学生よりも低くなる。

以上、親子関係の相対性を表3のように日韓中で要約してみた。おおまかにみると、日本の学生は性差の軸による相対性が一番低い。しかし、世代差でみても性差でみても、人間関係の相対性に権威主義的態度が含意される程度は中国よりも高くなっている。

韓国の学生は世代差の軸でも性差の軸でも人間関係の相対性が一番高く、かつ人間関係の相対性に権威主義的態度が含意される程度も高いと考えられる。

中国の青年は、世代差の軸でみると相対性が一番低い。また、世代差でみても性差でみても、権威主義的態度が含意される程度が一番低い。たしかに中国の青年は性差の軸による相違度は高いが、しかし、性差によって人間関係の相対性に権威主義的態度が含意される程度は低くなる。

## 4 親族集団における互惠的態度

### 4.1 分析図式

NHK 調査では血縁集団、地縁集団、機能的集団における人間関係を分析するために、それぞれ親せき、近隣、職場でのつき合い方を尋ねている。そして、つき合い方として、＜形式的＞、＜部分的＞、＜全面的＞の3つのつき合い方が設定されてい

る。例えば、親せきの場合は、「一応の礼儀を尽くす程度のつき合い」を<形式的>つき合い、「気軽に行き来できるようなつき合い」を<部分的>つき合い、「なにかにつけ相談したり、助け合えるようなつき合い」を<全面的>つき合いとしている。また、人間関係スコアとして、<全面的>に2点、<部分的>に1点、<形式的>に0点が与えられている<sup>21)</sup>。

NHK 調査の分析では<sup>22)</sup>、<形式的>人間関係は「近代的な自我意識が自己防衛のためにたどりつく究極の姿であり、この傾向を望む人々は少数派ながらも増加傾向にある」という。また、<全面的>人間関係は「前近代的・下町人情のつきあい」や「酒でも飲みながら社会問題などについて徹底的に議論し合うことができる人間関係」であり、かなりの人々が「わずらわしいもの」と感じ始めているに違いないという。そして、<部分的>人間関係は<形式的>と<全面的>の中間にあって、「柔らかな、もしくは滑らかな殻を隔てて他人と接しよう」とするつき合い方であり、この<部分的>人間関係が、新しい世代によって志向され、これから主流になる人間関係であるという。

われわれの調査でも NHK 調査とほぼ同様の質問項目を用いて人間関係の相対性を分析することにした。NHK 調査との違いは、第一に、親せきを「兄弟姉妹」、「父方おじおば」、「母方おじおば」の3つに分けたこと、第二に、職場の同僚の代わりに「大学の友人」を用いたことである（ただし、北京職業青年、河南農村青年、山東農村青年は「職場の同僚」を用いた）。第三に、本稿では人間関係のスコアを「互恵性」のスコアとして解釈することにした。NHK 調査では「その他」と「わからない」に0点を与えているが、本稿では「その他」と「わからない」を欠損値扱いにした。

#### 4.2 親族集団における互恵的態度

3節では家族集団における伝統的集団主義の態度として権威主義的態度を中心に日韓中の青年を比較した。もう一つの伝統的集団主義の態度として互恵的態度もあげられる。われわれの調査では、問4の「年老いた親の面倒」が互恵的態度を示すものと考えられる。ただし、本稿では問4による日韓中の比較検討は行わない。なぜなら、日韓中の社会保障制度の違いが大きすぎるため、問4の回答傾向を青年の意識の反映として日韓中で比較することが困難だからである。そこで、親族集団における互恵的

21) NHK 放送世論調査所編（1980）前掲書、15頁。

22) NHK 放送文化研究所編（2000）前掲書、181頁。

態度を日韓中で比較検討することにした。

われわれの調査の問3はもともと NHK 調査の質問項目である。NHK 調査で日本の親せきづまいの特徴をみると、1973年から1998年まで一貫して＜全面的＞つき合いが減少し、＜部分的＞つき合いや＜形式的＞つき合いを望む者が増加している<sup>23)</sup>。また、属性別にみると、性差による違いがあまりなく、世代差による違いが大きいという。とくに第二次世界大戦後に生まれた世代に＜全面的＞つき合いを望む者が少なく、＜部分的＞つき合いを望む者が多くなっている<sup>24)</sup>。今回のわれわれの調査対象者と同世代の青年を1998年の NHK 調査でみると、親せきとの＜全面的＞つき合いを望む者が3割前後、＜部分的＞つき合いを望む者が5割から6割になっている<sup>25)</sup>。以上が、おおまかな日本の特徴であるが、本稿ではさらに親せきを「兄弟姉妹」、「父方のおじおば」、「母方のおじおば」の3つに分け、自分と相手の属性の違いによってつき合い方に違いがないか調べることにする。

#### 4.2.1 兄弟姉妹との関係

まず、最も身近な親族集団は兄弟姉妹を範囲とする親せきだろう。問3aでは、個人が社会人として独立した後に兄弟姉妹とどのようなつき合い方を望むかを尋ねた。韓国の学生と中国の青年では＜全面的＞つき合いを望む者が8割から9割以上になり、社会人として独立した後も兄弟姉妹との「互恵的」関係が望まれていると解釈することができる。これに対して、日本の学生は＜全面的＞つき合いを望む者が3割から4割、＜部分的＞つき合いを望む者が4割から5割である。身近な親族集団で日韓中を比較すると、韓国の学生と中国の青年では互恵性が高く、日本の学生では互恵性が低くなっている。

ただし、日本の学生を性別で比較すると（問3a）、女性の方が＜全面的＞つき合いを望み（京都女性55.8、京都男性39.5）、男性の方が＜部分的＞つき合いを望んでいることが分かる（京都女性38.6、京都男性47.8）。つまり、兄弟姉妹の人間関係に互恵性が含意される傾向は、女性の方が男性よりも強い。

#### 4.2.2 おじおばとの関係

親族集団における人間関係の相対性をみるために、われわれの調査では「父方のおじおば」と「母方のおじおば」を区別することにした。

23) 前掲書、177頁。

24) NHK 放送世論調査所編（1980）前掲書、342-44頁。NHK 放送文化研究所編（1998）前掲書、29頁。

25) NHK 放送文化研究所編（2000）前掲書、180頁。

表4 父方おじおばと母方おじおばのつき合い方の相対性 (問3b-問3c)  
(単位: %)

全 体	京都 n=757	大阪 n=182	テグ n=940	全州 n=573	北学 n=681	北職 n=327	河南 n=225	山東 n=247	合計 n=3932
母方に強い互恵	18.6	14.8	18.3	23.4	9.0	12.2	7.6	9.3	15.6
父方と母方同一	77.0	78.6	73.2	68.4	81.1	76.8	64.4	80.2	75.1
父方に強い互恵	4.4	6.6	8.5	8.2	10.0	11.0	28.0	10.5	9.3
男 性	京都 n=366	大阪 n=178	テグ n=291	全州 n=347	北学 n=449	北職 n=144	河南 n=126	山東 n=122	合計 n=2023
母方に強い互恵	11.7	14.6	15.8	19.6	8.9	11.1	9.5	6.6	12.8
父方と母方同一	83.6	78.7	73.2	71.2	79.7	76.4	62.7	77.0	76.5
父方に強い互恵	4.6	6.7	11.0	9.2	11.4	12.5	27.8	16.4	10.7
女 性	京都 n=390	大阪 (n=4*)	テグ n=649	全州 n=226	北学 n=232	北職 n=183	河南 n=94	山東 n=122	合計 n=1900
母方に強い互恵	25.1		19.4	29.2	9.1	13.1	4.3	12.3	18.7
父方と母方同一	70.8		73.2	64.2	83.6	77.0	66.0	82.8	73.5
父方に強い互恵	4.1		7.4	6.6	7.3	9.8	29.8	4.9	7.8

\*大阪女性は n=4 と少ないため省略

まず、父方と母方に共通の特徴をみると、各国とも<全面的>つき合いが減少する(問3b, 問3c)。日本では<全面的>つき合いを望む学生が1割程度に減少し、韓国や中国でも<全面的>つき合いを望む青年が2割から4割に減少する。また、日本の学生では、おじおばと<形式的>つき合いを望むものが5割に増加する。

表4は、「父方のおじおば」の互恵性のスコアから「母方のおじおば」の互恵性のスコアを引き算し、父方と母方の相対性を互恵的態度で比較したものである<sup>26)</sup>。表4でみると、日韓中とも父方、母方に同一の態度で接する者が一番多い。ただし、日本や韓国では父方よりも母方と強い互恵的関係を望む傾向がある。これに対して、中国では河南省農村青年で父方と強い互恵的関係を望み、その他の3地域・成層では父方と母方の差があまりない。

つまり、日本と韓国では、親族関係の相対性に互恵性が含意される傾向は、男性よりも女性に強いと考えられる。これに対して、中国では親族関係の相対性に性差が影響することは少ないといえよう。日韓中の特徴をおおまかに整理すると表5のように

26) 「父方おじおば」と「母方おじおば」が共にいる者だけに対象者を限定したうえで、互恵性のスコアを減算し、以下のように定義した。  
[問3b-問3c≤-1] のとき「母方に強い互恵」  
[問3b-問3c=0] のとき「父方と母方同一」  
[問3b-問3c≥1] のとき「父方に強い互恵」



表5 おじおばとの人間関係の相対性

相対性の軸	世代差	性 差	
		父方と母方	甥と姪
日本の学生	互恵度 低	相違度 中 母方に互恵	相違度 高 姪が母方に互恵
韓国の学生	互恵度 中	相違度 高 母方に互恵	相違度 中 姪が母方に互恵
中国の青年	互恵度 中	相違度 低 父方母方の差 小	相違度 低 甥と姪の差 小

なる。

NHK 調査では日本の青年が望む親せきつき合いに性差の違いがあまりみられないが、「親せき」を「兄弟姉妹」,「父方おじおば」,「母方おじおば」に細分化して尋ねると、日本でも女性が<全面的>つき合いを望み、男性が<部分的>つき合いを望む傾向があることが分かった。

## 5 要約と今後の課題

現代青年の集団主義的態度の特徴として家族や親族集団における人間関係の相対性を選び、日本、韓国、中国の青年を比較した。相対性の軸には世代差と性差の属性を選び、人間関係の相対性に権威主義的態度と互恵的態度が含意される程度を比較した。

日本の学生は、親子関係でみると、相手によって自分の態度を変える割合が一番低い。しかし、権威主義的態度をもっていないわけではない。父母に対して同一の態度をとる傾向が強いのは、父親の権威が低下したからであると解釈することができる。親子の世代間でみると日本の学生は中国の青年よりも権威主義的態度が強いと推測される。また、親子関係に権威主義的態度が含意される傾向は男性に強い。また、日本の学生は、親族集団の人間関係に互恵的態度が含意される傾向が一番低い。ただし、互恵的態度が含意される傾向が女性に多くみられる。

韓国の学生は、親子関係に権威主義的態度が含意される傾向が一番強く、また、親族集団に互恵的態度がみられる。つまり、集団主義的な態度を家族や親族集団内で一番強く持っているとは推測することができる。

中国の青年は親に対して権威主義的態度を期待せず、これは韓国の学生とは対照的

だった。しかし、中国の青年は自分と親の属性によって態度を変える傾向が最も強い。家族でみる限り人間関係の相対性が3ヶ国の中で最も高いことから、家族内における人間関係は集団主義的なものであると推測できる。しかし、中国では、性差や世代差などの属性を軸にした権威的關係はあまりみられない。中国の場合は、親に求める態度に権威主義的な順序づけが成立していない可能性がある。中国における権威主義的態度の意味づけを再検討する必要がある。

本稿では伝統的集団主義の弊害が権威主義的態度にあるとみなし、これを互惠的態度に変えることが集団主義的な民主主義の育成に必要であると仮定した。現代の日韓中の青年には、集団主義の弊害を克服して人間関係の相対性を生かす方向がみられるのではないか。日本の学生や中国の青年が、権威主義的態度の強度は低いものの、依然として集団主義的態度を保持している傾向は見逃せない。今後の課題としては、家族や親族集団を超えて、日韓中の青年の社会意識に伝統的集団主義の弊害を克服する傾向を探ることである<sup>27)</sup>。

---

27) もともと本稿では、人間関係の「相対性」と「互惠性」に加えて、伝統的集団主義の弊害を克服する要素として「開放性」、「正当性の社会的承認」についても考察する予定であった。また、家族や親族集団を越える集団において日韓中の青年の集団主義的態度を比較検討する必要がある。